

人間悟性論における自由についてのロックの思想

太田 可夫

一 人間悟性論と自由についてのロックの思想

John Locke の自由についての思想は、かれの二つの著作から読みとることができる。一つは、*An Essay concerning Human Understanding* (1690) であり、他は、*Two Treatises of Government* (1690) である。

人間悟性論第二巻第二十一章において、かれは自由を論じている。あとにふれるように、悟性論はかれの思想體系そのものではない。それはある偶然的動機からかかれたものである。讀者への書簡はこの事情をつぎのように説明している。數人の友人とともに、ある問題について議論していたが、いろいろの困難がでてきて、議論がゆきづまつてしまつたので、ロックは、道がちがつていたことに気づき、*to examine our own abilities* することが必要であることに気づき、したがつて、なにが本来、悟性にとつてとりあつかうにふさわしいものであるかを見ることが必要であることに気づいたのであつた。悟性そのものを研究の對象とする、人間悟性論はこうして始められたのであつた。それは連絡なしにかかれ、長い間中断されたあとで再び始められ、晩年の閑暇の中で、ようやく現在の形にまとめら

れたものである。

このような悟性論の成立事情からみれば、それは一つの思想體系であるよりは、むしろ、その準備である。それになによりも明らかである。しかし、このことは悟性論がその背後に一つの思想體系を豫想しえたことはすこしも矛盾しない。むしろ、思想體系なしには、たとえ、このとき explicit な體系がみられないときでも、implicit な體系がないときには、悟性論は成立しえなかつたであろう。悟性論自体が一つの思想體系であることはひとたれも疑わない。しかし、悟性が認識能力であるかぎり、悟性によつて成しとげられた認識の全體の把握——それはここで思想體系とよばれているものである——が可能でなかつたならば、どうして悟性の能力やそのそれにふさわしい對象について立論しうるであろうか。

實踐哲學の領域ではロックはボズィティヴな研究を公にしている。さきあげた政治論がそれである。しかし、理論哲學の領域ではかれは悟性論を公にしているだけで、世界すなわち、自然および人間についての認識の成果の全體を公にしていない。人間悟性論は一つの體系とも考えることができるが、明らかに一つの目的をもつて著わされた悟性論は「人間の認識」とは考ええない。したがつて理論哲學の領域ではかれは、認識能力については語っているけれども、それを使用してなにを認識したかについてはなにごとも語っていない。

すでにのべたように、ロックが悟性自体の研究に専心して、認識成果の體系化を志さなかつたのは、自然認識そのものに對するかれの考え方が理由であつたのかもしれない。ロックによれば自然は人間にその全容を現わさない。従つて、自然にかんする人間の認識は確實性をもたない。これに對して、道德の原理は證明可能であり、したがつて、

人間悟性論における自由についてのロックの思想

確實性をもちうる。自然哲學よりも道德哲學を重視するかれの理論的態度が、認識成果の體系化よりも、認識の進行を能力の側で、すなわち、主觀の側で把握しようとする態度をとらせたものと推定することができる。

これらにもかかわらず、ロックは、たとえ *explicit* に體系化されなかつたとはいえ、理論的體系をもつていたといえる。それに對應して悟性論を展開したと考えられる。

悟性論の成立事情やかれの人間認識に對する考え方から、悟性論の基底を形づくるものが、かなり複雑なものであることが推定される。第一に、そこにはかれの理論的體系の構成要素が組織的にではないが含蓄されている。それらの諸要素は自然哲學、道德哲學の全領域にわたっている。悟性論と同じような意圖をもつカントの純粹理性批判と對照すれば、理論理性と實踐理性とをカントはきびしく區別するが、したがつて、純粹理性批判には理性の理論的使用についてのみ批判がなされているが、悟性論ではこの區別はない。また、純粹理性批判の背後に豫想される自然認識は、カントの *Schema* にしたがつて原理的に排列されているが、悟性論ではそうではない。第二に、悟性論の意圖に對應するように、また、對應する限度において、これらの諸要素は取りあつかわれるのが當然であるのに、ロックはときに、それを忘れるかあるいは無視することがある。登場すべきときに登場した役者が、ふりあてられた役以上を演じて、觀客をこまらせ、また、よろこばすようなものである。他の箇所には見ることできぬかれの思想が明らかにされるいみで、よろこばしいけれども、われわれは、全體の中でしめるべきそのことの役割を見失つて困亂する。本稿で問題とする自由にかんする章が、まさしくこの例にあたるのである。

悟性論を問題にするときには、したがつて、二つのことが注意されなければならぬ。第一に、悟性論の中心的意圖

を正確に把握すること、そして、それに基づいて、問題をつねにこの中心的意圖に結びつけて考察することが必要である。第二に、悟性論にとりあつかわれている問題を、中心的意圖とは結びつけず、それ自身として考察し、悟性論を成立させる理論的背景を前面におしだし、かれが發表の機會をもたなかつた思想を明らかにしなければならぬ。

したがつて、悟性論からロックの自由についての思想を読みとるときには、まず、自由の觀念がなぜ悟性論でとりあげられたかを明らかにし、ついで、自由の觀念そのものをかれの思想體系の中で明らかにしなければならない。

悟性論第二卷第二十一章は「力(power)について」と稱されている。それはけつして、自由を論ずるための特別の章ではなく、一般に力の觀念がどうしてえられるかを論ずる章である。自由の觀念がそこで論じられるのは、もっぱら自由が力と考えられたからである。しかも重點は力よりもむしろ自由に移つてしまつたように見える章である。こゝに困難な問題がよこたわつている。

悟性論からみた自由の思想はきわめて複雑であるが、政治論からみたそれは、きわめて明瞭である。しかし、さらにすすんで、悟性論からみた自由と政治論からみたそれと関連させてみるとときには、また別な困難が生ずる。これらの諸問題をめぐつて、ロックの自由についての思想を明らかにするのが本稿の目的である。自由についての思想の研究にあつて、必要以上に思われるほど悟性論そのものの主題にふれるのは、問題の性質上やむをえない。

二 人間悟性論の認識論的性格

人間悟性論は人間の悟性自身を研究しようとする。それは人間の認識の起原(original)確實性、および限界と、

人間悟性論における自由についてのロックの思想

あわせて、信仰、意見、および同意の根據ならびに程度とを研究しようとする。⁽¹⁾ ロックにとつては認識は、觀念の一致不⁽²⁾一致の感覺(perception)にほかならぬから、觀念の起原を探索することがその出發點となる。

ロックによれば人間は生まれたときには、心の中になんらの觀念をもたない。心はそのとき白紙である。いかなる意味でも生得觀念(innate ideas)は否定される。悟性論は、こうして生得觀念の否定の章から始められ、諸觀念の起原を論ずる章がそれにつづく。ここにも多くの問題があるけれども本稿はそれにふれない。ただ觀念の意味とその背後に豫想されるものについてだけ、考察を加える。

觀念はわれわれの心の中にあると明瞭に意識されるものである。意識されるというとき、意識は意識以下の意識または潜在意識または無意識の意識の意味ではない。すなおに人間にそれと氣がつかれ、認められるものが意識されるものである。心の中にあるということは、そのまま、意識されているということである。心の中にあつて意識されていないということはありえない。⁽²⁾ここに、生得觀念の否定に對するロックの有力な論據の一つがある。

觀念は、したがつて、一定の限定をもつた現在の、表面的なものである。現實の人間の現實の意識の限定である。人間の認識活動における成果としての、いわば論理的なものとしての觀念はここでは考えられていない。それは抽象的ではない。個々の人間の現實の意識に、限定されたものとして登場してくる心的なものである。普遍的觀念——たとえそれが論理的にどれほどよく要請されるべきものであらうとも——はロックには認められない。人間の認識、意識について語られているときでも、理想型としての人間のそれが問題にされているのではなく、個々の人間のそれが問題にされているのであることは、とくに注意しなければならぬことである。この點ではロックはホッブスと同じ

く Nominalism の立場に立つものといえよう。これからみればロックの観念は論理的であるよりは心理的性格をもつと思われる。論理的なものを排しての心理的なものではなく、かれの観念の理論をつうじて論理的なものすべてを心理的なものにかえすことを試みる意味で心理的性格をもつものといえる。心理的ということが誤解を招くおそれがあるなら、経験的、意識的といふかえてもよい。経験は感覚と反省をいみする。⁽⁴⁾この両者はつねに個々の人間に意識されているべきだからである。

人が考えるときに、悟性の対象となるところのものはなんでも観念である。⁽⁶⁾考えること (thinking) は知覚すること (perception) ⁽⁶⁾であることである。観念は人間の意識の全領域をおおう。

観念が人間の意識の全領域をおおい、認識は観念の限界の内部の仕事であるけれども、ロックは観念以外のなもの存在をも認めなかつたわけではない。それはまた別の問題である。このことはきわめて重大である。存在と認識とはあいとおおわない。認識の限界は存在の限界の内部にある。物体の第一性質、第二性質、第三性質、實體の観念等についてのかれの思想からみれば、このことは明らかである。

いいかえると、このことは存在が必ずしもすべて観念とはならないということである。これをうからいえば、観念から存在を眺めることになるが、観念から存在を眺めることは、主観的なもので客観的なものを眺め、また、構成する意味ともなるが、ロックの場合にはそうではない。観念はまだ認識ではない。また、観念には、外界にその原型 (archetype) をもつものもあるけれども、そうでないものもある。外界の物体と関係のある観念には、外界の物体の本質を示すと思われるもののほかに、なおそうでないものがある。観念の一致不一致の感覚が認識であるという

きの觀念には、これらの性質のちがつた觀念がすべて含まれている。したがつて認識は、たとえば、カントにおいてのように、主觀的觀念——純粹悟性概念をこうよんでよいであろう——が感覺の所與を構成するという意味において、主觀と客觀との關係ではない。客觀的世界は觀念を與えるものではあるけれども、ロックの認識對象の全部ではない。認識、認識對象の意味は、カントおよびその後繼者たち——認識論がカント的認識論の概念構成をそのまゝうけついでいるかぎりにおいて——とロックではちがつている。

しかし、そうはいうものの、ロックにおいても、外界の對象にかんする認識は成立する。外界の對象から觀念が與えられるかぎり、そして與えられた觀念群の間に、一致不一致の感覺があるかぎり認識は成立する。認識それ自身が對象に關係するのではなく、認識の要素である觀念が對象に關係する。カントにおいては、認識の内容を形づくる感性的直觀の多様は、一律に、直觀の形式であるところの空間および時間の中に與えられ、空間および時間はこうして、現象のかくことのできぬ制約になる。對象的世界は空間時間の形式の下でのほかに現象しえないこととされる。對象的存在とその認識とはこの意味では同じものとなる。認識主觀は對象的存在を構成する。ここに主觀的觀念論が成立するのであるが、ロックでは、對象的存在の存在の一般的條件——カントにおいては直觀形式として空間および時間——は考えられない。對象的世界はそれ自體として存在している。しかし、その一般的條件を論理的にとりあげることはできない。對象的世界について、認識をもつことはできる。しかし、その認識は對象から與えられた觀念の間の一致不一致の感覺であるにすぎないから、對象の構造そのものを必ずしも表わさない。對象的世界は認識とは別げん然と存在する。すなわち、認識は對象的秩序の把握ではなく、まつたく、いろいろのしかたでえられた觀念の間

の関係であつて、純粹に人間的なものである。

すなわち、カントにおいては對象的世界は認識によつて構成される、いゝかえれば、存在と認識とはあいおう。これに反して、ロックにおいては、對象的世界は認識とは無關係ではないけれども、別の世界であり、別の原理をもつてゐる。いゝかえれば、存在と認識とはあいおうでない。カントの物自體の概念はすこしもこの解釋の妨げにはならない。カントは現象の背後に、物自體 (Ding an sich) をおく。「外的對象とよぶところのものは、われわれの感性の觀念 (Vorstellungen) にすぎず、……その眞の相關者 (wahres Korrelatum) すなわち、物自體はそれによつては認識され⁽⁷⁾ない。」物自體が認識されないといわれるから、存在と認識とは、おおわな⁽⁸⁾いといいうるかもしれない。しかし、ここで詳論することはできぬけれども、カントの物自體の概念はいくつかの意味をもち、物自體が認識されないというときにおいても、人間の自然的認識一般が不可能であるというのではなく、むしろ、自然を規則にしたがつて認識するために、カントはこの概念をおいたのである。物自體の概念は現象の眞なる相關者といわれるけれども、現象はたんなる心的假象 (Schein) ではなく、われわれが外的物體とよぶところのもののそのものである。對象的世界は現象界そのものである。このようにみれば、物自體の概念を考慮した上でも、なお存在と認識とはおおわ⁽⁸⁾ないといえる。ロックにおいても、同じように、物自體は認識できぬ⁽⁸⁾ともいえる。實體の觀念を論ずる章ではたしかにロックも外的物體の眞理のすべてが人間に明らかにされるとはいわない。しかし、ロックには外的物體が一つの存在として、人間の存在から區別されてゐることが確信されている。カントの物自體はこれほど強い意味をもたない。この外的對象は人間にはたらきかける。このはたらきかけはカントの *affizieren* とはちがつて對象の秩序の一部を人間にしら

人間悟性論における自由についてのロックの思想

せる。こうして知らせられたものが、ある種の、対象についての觀念である。觀念によつて対象の秩序がしらされる前に、そしてそれとは別に、対象が存在している。対象が人間にはたつきかけること自體も——これによつて觀念が人間に與えられる——対象の力として把握され確信されている。もしも、カント的のいうのであるなら、対象がこのような力をもち、対象がこの力のはたつきによつて人間にある種の觀念を與えうること自體が、一つの認識といわれなければならない。いかにしてこのことが可能であるかがとわれなければならない。ロックではそうでなかつたことはすでに明らかとなつたであらう。それはロックの認識論の前提であつた。

ロックがすべてのわれわれの觀念が經驗から、すなわち、感覺と反省からえられるとのべたことから、經驗主義がこれによつて始められたと一般に信じられている。それに對して疑問があるけれどもここではとりあげない。しかし、一つだけ讀者の注意をうながしたいことがある。それは經驗主義の意味についてである。經驗主義は、一般に、認識が經驗から發生することを主張するものである。この定義からすればたしかにロックは經驗主義者である。しかし、經驗の概念はじつさいには多義性をもっている。一人の哲學者の經驗の概念は他の哲學者のそれとちがつている。ことにロックの場合には、經驗は感覺のほかに反省を含んでいる。そして、反省は論理的思惟作用をも含んでいる。したがつて、經驗が論理的なもの矛盾するとは、ロックの場合にはいえない。認識論では、カント的概念構成の線にそうかぎり、經驗は認識に必然性を與ええないといわれる。しかし、ロックは經驗主義といわれながら、數學および道德性については必然性をもつ認識を確立しようとするのである。すなわち經驗と必然性とは矛盾しないものと考えられている。これが注意したい第一のことである。

さらに、経験主義のもとに、主観主義的経験主義が考えられがちであるが、ロックの場合はそうではない。すべての認識が主観的経験から発生すると考える経験主義によれば、経験から獨立する客觀的對象の世界は否定せられがちである。経験主義の論理的歸結を懷疑主義と考える一群の人々はこの考え方に立つている。ロックの場合には、経験それ自體がよつて立つ基礎がある。すなわち、人間の認識はすべて経験からえられた觀念に基いて形づくられるが、人間がこのような経験をもついわば存在論的地盤がある。さきに存在と認識とがあいとおおわないとのべたことがこれと對應している。形而上學をカントの意味においてではなく、存在の原理的把握と考えていいなら、この點にロックの形而上學的なものがみられる。すなわち、ロックの認識論は形而上學的基礎をもつていたといわなければならぬ。ロックの経験主義は形而上學的基礎の上に立つている。これが注意したい第二のことである。このことについて今少しく詳論してみたい。それは悟性論の性格をより明瞭にすると思われるからである。

認識の基礎にあるこの形而上學的世界はすくなくとも二つの要素を含んでいる。一つは宗教的要素であり、他は近代的自然哲學的要素である。

第一の宗教的要素は、もちろん、キリスト教的要素である。世界が神によつて創造せられ、支配せられているという思想が、人間の宗教的救済の思想とは別に、一つの世界觀として、ロックの理論の基礎にある。それは理論的研究の結論として指定されたものではなく、もつと根源的に理論を支えるものとして確信されているものである。この確信に基いて、單純觀念のあるものとその原型 (archetype) との對應の保證が與えられたのであつた。しかし、このロックの宗教的世界觀のもつ意味をあまりにも強調することは、われわれからみれば、ロックの哲學的功績を低める

人間悟性論における自由についてのロックの思想

ことになる。かれの哲學がこの基礎の上にのみたてられたものであるならば、それはたんに神學的であつて、近代的哲學的とはいへないと思われる。それは第二の要素と結合してのみ哲學的意味をもつ。

第二の自然哲學的要素は近代的要素である。

近代の自然哲學は自然を反省され、確立された方法論に基いて把握した。自然は數學の諸原理に従うものとして、實驗的に把握された。自然は、ただたんに神に創造されたものとして、聖なる秩序をもつものとしてではなく、この人間的諸原理によつて把握されうる秩序をもつものとして把握された。この自然の秩序は、聖なる秩序をうらに豫想することによつて、人間に秩序として把握されうるものと考えられた。聖なる秩序があることが確信されるだけであつて、現實には、人間の認識活動——ロックの意味する認識活動ではない——によつて、發見された秩序が、聖なる秩序の現われとして考えられただけである。人間の認識が前進する。それにしたがつて、聖なる秩序は實際には後退するのであるけれども、人間の認識を自己の表現と考えることによつて、同じように前進する。しかし、聖なる秩序はどこまでも、自然の方法的認識と同一であるとはいへない。それには限界がある。自然解釋が問題である場合にはそうではないが、當然それにつづいてくる、人間の解釋が問題である場合には、両者は衝突する。ロックはその限界點に立つている。かれは人間の自然認識をそのままに聖なる秩序の現われであると考へている。しかも、かれは合理的精神の前進こそ人間の使命であると考え、不合理と考へられたこともあつた信仰は、ロックによれば、理性と矛盾しないと考へられる。The Reasonableness of Christianity, as delivered in the Scriptures, 1695. はこのやうな意圖の下にかかれた。

古いアリストテレスの形而上學やスコラ哲學とは別な新しい自然哲學がかれに新しい世界觀を與える。Elements of Natural Philosophy なる小論文で、ロックは物質と運動、宇宙、太陽系、地球、地球上の無生物および生物、五感、人間の悟性について、その當時の自然哲學の成果と思われるものをのべている。⁽⁹⁾その内容についてはここに詳しくのべる必要はない。ただ、この宇宙論の最後に人間の悟性を論じていることを注意するだけで十分である。これはホッブスが De corpore (物體論) の最後で感覺、意志などを論じたのに完全に對應している。すなわち、人間の認識の問題は宇宙論的に眺められた。人間の宇宙論的な發生について語られていないが、宇宙の自然的秩序の内部で人間が、そして人間の悟性が問題とされているのである。このことがわれわれにとつては重要である。悟性論にはしばしば、感覺の觀念 (ideas of sensation) ⁽¹⁰⁾ についての物理的説明があるが、それは、かれのこの世界觀に基いている。

なお、巨視的世界のほかに、微視的世界もかれの理論に大きなえいきようを與えた。Klein によれば、ロックの六八五年六月二二日の日記に、かれが檢微鏡によるいくつかの觀察をし、それに驚嘆したことが詳しく記されていることが報告されている。⁽¹¹⁾悟性論第二卷第二十一章の最後にのべられている、微細な物體を感覺しうるほど鋭敏な能力が人間にあつたならば、色彩、音等諸感覺の性質がもと明らかにされうるであろうという思想は、Robert Boyle ⁽¹²⁾ のえいきようによるものであるとともに、この微視的世界のえいきようによるものである。

ロックの時代の指導的哲學はもちろんデカルトの哲學であつた。ロックはそこから多くのえいきようを受けた。デカルトの合理主義的な方法論、認識論からはもつとも大きいえいきようをうけている。Aaron は悟性論第四卷第二

章がデカルトの *Regulae* の開卷の部分と類似していることを指摘している⁽¹⁴⁾。第四卷第二章は認識の程度についての章であるが、この章の基調は直観主義的であつて、*intuition* の觀念はかれの思想としては明瞭であるけれども、全理論體系の中では、あまりにもかんたんに古典的哲學の傳統をそのまゝにうけいれたように見えるものである。すくなくとも第二卷とは調子がいちじるしく變つてゐる。明證性の問題すなわち、*Clear and distinct* の問題もかれはデカルトにおうてゐる。しかし悟性論の基調は反デカルト的である。デカルトに反對する理由はデカルトが *speculative* であり數學的であつたけれども、その體系を *fancy* の上にたてたためである⁽¹⁵⁾。 *rational experiments and observations* を缺いてゐたためである。いゝかえれば、ペイコン以來のイギリス哲學の傳統である實驗と觀察とによる自然解釋の精神がデカルトになかつたことがロックの反對の理由である。デカルトは形而上學的に物體を延長として規定するが、ロックは自然哲學的に、固體性 (*solidity*) として物體を規定する⁽¹⁶⁾。もつとも強くデカルトに反對したのはこの點であつた。ここにいわゆる *new philosophy* の問題があつた。

さきに認識の基礎にある形而上學的なものが二つあるといつたが、そのうちの第二のものはこの意味の實驗と觀察とに基礎をおく自然哲學であつた。Aron はさきにあげた箇所、ロックのいう合理的實驗と觀察に基いた自然哲學とはニュウトンとボイルのそれをさしてゐるとのべてゐる。したがつてニュウトンに代表される古典的物理學がロックの認識理論の基礎にある自然哲學である。そこでロックの世界像はつぎのようになる。

世界の創造者であり、支配者である神が實在する。神の實在は證明できる。これが宗教的な要素である。さて、つぎに、物體と運動との秩序の總體としての自然界が存在する。自然的物體の内部的構造は微視的であるために人間に

はまだ認識できない。物體は物體にはたらきかけるとともに人間にはたらきかける。物體の人間に對するはたらきから、第一に物體の第一性質 (primary qualities) にぞくする諸觀念が、第二に、特に人間の感官に對するはたらきから、第二性質 (secondary qualities) にぞくする諸觀念がえられる。前者は物體の本質にぞくするものであり、後者は物體の感覺的性質にぞくするものである。この場合に、觀念がえられることがのべられているだけで、えられた觀念と、その對應者との關係、對應者に對して、觀念が本質上なんであるかはのべられていない。たとえばホッブスにおけるように、觀念は、運動である感覺のうすれたものであるというように。

自然的物體からのはたらきは物理的である。物理的運動の結果はあくまで物理的運動であるべきである。この點ではホッブスはコンセクエントである。これに對してロックによれば運動の結果が觀念であるのか、はたらかれたことに對應して、それを機縁として、精神的なものとして觀念が生ずるのであるかは明瞭にされていない。ただわれわれの意識の現實として觀念を示すに止まつている。

これらの諸性質をロックは力 (power) とよんでいる。

人間は物體とはちがつたものとしてみられる。それは自己保存の體系であり、他の無生物および生物をその生命維持のためには利用できる特殊な神の恩寵をうけた存在である。人間は諸種の、物體としての第一、第二性質のほかに、力をもつている。そしてその力をはたらかせる。この人間の内面的諸力およびそのはたらきは、反省的に人間にその觀念をあたえる。これが反省の觀念とよばれるものである。

ロックでは感覺 (sense, sensation) と觀念とをしいて區別しない。赤の觀念は、一般觀念 (general idea) として

人間悟性論における自由についてのロックの思想

の赤の觀念を意味しないで、ある花の赤さの觀念を意味させるときでも、現にみている赤さと記憶の中にある赤さでは觀念のしかたがちがうと思われるのに、その區別を問題にしないで、同じように感覺の觀念とよばれる。觀念の對象を問題にしないで、觀念のみを問題としようとするから、意識において明瞭に限定されるかぎり觀念なのであるから、對象との關係をそれほど深く追求する必要を認めなかつたのであらう。觀念の original としての對象世界が問題であつたのであつて、その内部構造はとわれなかつた。

反省の觀念についてもそういえる。反省によつていかにして觀念がえられるかが問題ではなく、また心的諸力の全體的内部構造が問題ではなく、反省に應じて明らかとなる反省の諸觀念がのべられるのである。反省の諸觀念は、したがつて、デカルトの *cogito* の意識がもつような認識主觀的な意味をもたない。人間のもつ諸力の活動が内面性であるが、ロックはそれを理論の根基にすえて、そこからかれの體系をくみだてようとはしない。認識主觀、内面的なものがロックにないのではなく、むしろそれらはロックの理論のうしろにあるものであつて、對象的世界が存在すると確信しながら、全面的には認識とならなかつたように、主觀的世界が存在することを確信しながら、それを原理的に論理的に把握しなかつたのである。

いゝかえれば認識論でいうような主觀客觀の概念はロックはもたなかつた。しかし、主觀的世界と客觀的世界とは區別されて、かれの認識理論の基礎にある。物體が人間にはたらき、人間は物體から觀念をうる。人間は人間の認識についてのみではなく諸力をもち、物體にもはたらきかけ、自己自身にもはたらきかけるが、この諸力とそのはたらきは反省されて反省の諸觀念を與える。すなわち、對象的世界の構造と人間の構造とがはたらきあうことを前提とし

て、その結果人間の觀念となるものだけを明らかにしようとしたものといえる。觀念の現象學といえはロックの認識理論の性格をいくぶんでも分りやすくしうるであろうか。

對象的世界と人間との關係——その關係によつて人間に觀念が生ずる——はロックにとつてはいわば物理的關係であつて認識論的關係ではない。認識は觀念の間の一致不一致の感覺であつた。觀念の基礎にあるこの對象的世界と人間との關係は、すでにのべられたように自然哲學によつて把握される世界である。觀念は自然哲學的に發生する。それは一つの自然秩序である。觀念から自然認識——カントの意味における認識——が生ずるのではなく、觀念が自然の基礎の上に成立する。

悟性論は構造をもたぬといわれる。B. Russel はロックの哲學は“piecemeal, like scientific work, not statuesque and all of a piece”と云う。悟性論が斷片的であるのは、かれが人間の認識の性格を謙虚に把握したためであり、もつと本質的には、この觀念となつた斷片を支える自然的秩序を確信していたためであるといふべきである。あらわになつたどの斷片も、あらわにはならない秩序に支えられていると考えられたからである。

觀念の基礎を形づくる第一、第二の要素はともに重要である。第二の要素と矛盾しないかぎり、第一の要素はロックの哲學の價値を減ずるものではない。

- (1) Locke, The Works of John Locke, in Nine Volumes, London, 1824, Vol. 1, p. 1. Locke, Vol. 1, p. 2.
- (2) Locke, Vol. II, p. 59 (3) Locke, Vol. I, p. 69 f. (4) Locke, Vol. I, p. 77 (5) Locke, Vol. I, p. 7 (6) Locke, Vol. I, p. 105 (7) Kant, Kritik der reinen Vernunft, Reclam, S. 103 (8) Harten-

人間悟性論における自由についてのロックの思想

一 橋論叢 第二十八卷 第二號

- stein, Locke's Lehre von der menschlichen Erkenntnis in Vergleichung mit Leibniz's Kritik derselben, Leipzig, 1861, S. 257 (9) Locke, Vol. II, Elements of Natural Philosophy (9) Locke, Vol. I, p. 1, p. 112, p. 274 (11) Lord King, The Life of John Locke, London, 1830, Vol. I, p. 308 (21) Locke, Vol. I, p. 273f. (13) R. I. Aaron, John Locke, London, 1937, p. 14 (14) Aaron, op. cit., p. 11 (21) Aaron, op. cit., p. 12 (16) 拙稿ロックの「人間悟性論」における觀念の認識論的意味 一橋論叢第九卷第二號 なおこは「デカルトとの比較も」をいふ。(17) B. Russell, A History of Western Philosophy, London, 1948, p. 633

三 力の觀念と自由の觀念

ロックは悟性論第二卷第二十一章「力について」で自由について論じている。この章は力を論ずるのが主題として掲げられているが、力については五五頁のうちわずかに四頁がさかれているだけで、それも自由の觀念を導きだすための準備とみなされるから、實際は自由が主題だといふことができる。さきにもすこしふれたように、悟性論になぜこのように詳細に自由が論じられなければならないかはあまり明瞭ではない。自由の概念が當時の思想界で、したがってまたかれの思想の中で重要な意味をもっていたこと、かれがそれに對して一つの新しい解釋をもっていたことはすでに明瞭であるけれども、悟性論のこの章でそれをこれほどに展開することは所をえていないようにも見える。

悟性論の第二版(1694)ではこの章は内容について本質的に改訂された。意志の最後の決定に坎する思想が變更された。このことについてロックは讀者への書簡で、人間の心のはたらき(working)をもつと精密に検査し、心を動かす諸動機や諸見解(views)をもつと嚴密に吟味した上で變更の理由を認めた⁽¹⁾とのべている。このことはこの

章がロックの重大な關心の對象であつたことを有力にものがたつてゐる。これによつてみれば、觀念の起原を問題にする卷で自由を詳論するのは、他に適當な場所と機會がなく、しかも詳論をしないにはあまりにも重要な内容を自由についてかれがもつていたと考えるべきであらう。自由の思想が力の章で展開されるのは、ロックにしたがえば、自由が力と考えられたからである。われわれは、したがつてまず力の觀念を明瞭にしなければならぬ。

力の觀念がどうしてえられるかから敘述が始まる。

力は感覺と反省からうけとられる單純觀念である。⁽²⁾人間のもつすべての觀念は單純觀念 (simple ideas) と複合觀念とに分けられる。單純觀念はいろいろの仕方と與えられるが、それには關係なく、一樣に、與えられるのであつて、人間によつて作られるのではない。人間の心はこの場合完全に受動的である。これらの單純觀念は心に提供されたとき、悟性はこれをもつことを拒むことはできず、また刻みつけられたとき變えることはできず、また拭いさつて悟性自身によつて新しいものを作ることができないものである。⁽³⁾

單純觀念をくりかえし、比較し、結合することによつて複合觀念がえられる。單純觀念の結合によつて複合觀念がえられるという考え方は原子論のえいきようであるとみられる。單純觀念は感覺と反省からえられるから、感覺からえられる單純觀念だけをとつて、ロックの單純觀念の理論を考へてはならない。感覺の場合には心が受動的であることはきわめて明瞭であるが、ここで問題にする力の觀念はそのえられ方がむづかしいものである。力の章は力の單純觀念がいかにしてえられるかを問題にする。

力の觀念はつぎのようにしてえられる。

人間悟性論における自由についてのロックの思想

「心は、毎日外界の事物の中に認めるかの諸單純觀念の變化を、諸感官によつてしり、いかにして一つのものが終り、なくなり、前にはなかつた他のものが存在し始めるかに注意し、また、かれ自身の（心の）中で起るものを反省し、あるときは外界の對象がその諸感官に與える諸印象（impressions）によつて、またあるときは、自己自身のえらんだ決定によつてその諸觀念の不斷の變化を認める。存在したとたえず認めたところのものから、同様の諸變化が未來も同様の諸事物の中に同様の諸作用者によつて同様の仕方によつて起ることを結論する。そして一方のものにその諸單純觀念のどれかが變更される可能性を考え、他方のものにこの變化を生ぜしめる可能性を考える。こうして、力とよぶかの觀念をうるのである。」⁽⁴⁾こうして、火は金をとかす力を、金は火によつてとかされる力をもつといわれる。すなわち力は二種である。變化をおこさせる力——active power と、變化をうける力——passive power とである。⁽⁵⁾

ライブニツはそのロック批判で、力の章についてはつぎのようにのべている。かれは力は一般には變化の可能性であるとのべ、さらに能動的な力と受動的な力とは力の二種であるとするロックの思想を、一般に變化は一方の subject には能動（action）であり、他方の subject には受動（passion）である點から、支持している。ライブニツはさらにかれ自身の思想をアリストテレスを引用しながら展開している。⁽⁶⁾しかしそれには深くたちいるつもりはない。

力を二種に考えるのは、自然哲學における形而上學的要素の残りのためと思われる。Aron のいうように、ロックの思想にはこの點に關して澄明さがかけている。⁽⁷⁾かれは力の觀念を變化から——變化の觀念からではない。力は單純觀念であつて直接的にしかえられない。——説明しようとする。そのときに、變化の現象自體を説明しようとするの

ではなく、變化の原因を求め、原因にはなにか變化をひきおこす、あるいは産出するなにかがあると考える。それが力である。能動的な力と受動的な力については、神が眞に能動的な力をもつと考えられているから、力の觀念の中には、ひそかに神の創造力の思想が混入しているように見える。この思想がロックにあるかぎり力の觀念には形而上學的な色彩がのこらざるをえない。しかもロックは能動的な力を力のより本質的な意味と考えているから、形而上學的な色彩は一層こいといえる。

この章の目的は力の起原を論ずることではなく、力の觀念をいかにしてわれわれがうるかを論ずることにある。それが果して成功したかどうかをみよう。

上にあげたロックの引用文からつぎのことは明らかである。力は變化を前提する。變化は變化をおこすものと、變化を受けるものとを前提とする。變化をおこし、變化をうける可能性が力である。従つて力の觀念は變化と作用と可能性との觀念を前提とする。變化と作用とは別である。作用には原因結果の觀念が含まれる。力の觀念を明らかにするためにはこれら諸觀念すなわち、變化・原因結果・可能性を明らかにしなければならぬ。

變化については特別になにも語られていない。ただ場所の變化である運動が、數箇の感官による單純觀念であることがまえに第二卷第五章でのべられているだけである。ロックによれば變化は單純觀念である⁽⁸⁾。

しかし變化はつねに變化しないものをその根柢に豫想している。變化しない同一のものの根柢の上に、ある存在が非存在に變ることが變化である。すなわち變化の觀念は同一性と差異性の上に基く論理的概念である。ロックは同一性と差異性との觀念を關係の觀念を論ずる場所で、論じている。運動は場所的時間的變化であると思われるが、なぜ

人間悟性論における自由についてのロックの思想

運動が單純觀念であるかは説明されていない。ロック理論の一つの缺陷ではないだろうか。

つぎに原因結果については、かれは別に章を設ける。第二卷第二十六章がそれである。その章は關係の諸觀念を論ずる場所のうちにおかれている。關係は様相 (modes)、實體とともに單純觀念からつくられるところの複合觀念 (complex idea) の一つである。したがつて力が單純觀念であるならば、それは少くとも、原因結果の關係であつてはいけない。かえつて原因結果は力の單純觀念をその基礎としなければならない。しかも原因と力とはロックでは非常に近い意味で使用されている。原因はそれ自身で原因ではありえない。原因は結果をつくりだすことによつてのみ原因でありうる。したがつて原因は結果との關係においてのみ原因である。原因について語るとは論理的には明瞭に結果について語ることである。原因にのみ強調をおくことはゆるされない。もしそうであるならば、原因と力とを同じ意味につかうことはできない。しかもロックは同じ意味とまではゆかないまでも、きわめて近い意味でこれらの觀念を使用している。ここに一つの混亂がある。フレイザは第二十一章の重版の度毎の改訂の理由をこの點に關連させている。⁽⁹⁾それは當然であると思われる。

原因結果の觀念はつぎのように説明される。感覺によつて、われわれは事物の變化に氣づく。それによつて個々のものが、すなわち性質も實體もともに、存在しはじめ、しかもこの存在そのものを、なにか他のものの due application and operation からうることを認めざるをえない。⁽¹⁰⁾この觀察から原因と結果との觀察をうることができる。單純觀念でも複合觀念でも觀念を生ずる (produce) ものを原因という一般的名稱でよぶ。生じたものは結果である。加熱によつて wax がとけたときは、熱が原因であり、とけることが結果である。

このようにみてくれば原因結果の觀念はきわめて明瞭であるようであるが、じつはそうではない。個々の場合にすでに問題がある。一定の觀念に他の一定の觀念が規則的に繼起することだけで因果關係の觀念がつきるかどうかがまず問題である。つきるとしても、この規則的繼起の原因が事物の中に實在して——ロックはこの考え方を多分にもつてゐることをさきにあげた——規則的繼起はその一つの現れとして見られる場合には問題はないとしても、そうでなく、われわれの觀念の側からこれを見る場合には、當然に規則的繼起の習慣的感覚の問題が生ずるはずである。それはヒュウムをなやました問題である。しかしロックはこの點はすこしも問題にしていない。かれはただ繼起の感覺とそれをひきおこす力を考えて因果關係の觀念を考えているだけである。

さらに一般的問題として考えると問題はいつそう難しくなる。因果關係の個別的問題をはなれて、因果律そのものをどうして觀念しうるかを問題にすれば、それはロックからは答えられない。自然を構成する原理としての因果律の問題ははるかにかれの關心の外にあつた。

要するに、ロックの因果關係の説明は平凡であつた。かれは規則的繼起の觀念だけで割りきるほど澄明な態度をとれなかつた。因果關係はたんなる繼起の關係ではなく、なにかそれ以上の要素を含んでいた。結果は原因にたんにつづくのではなく、原因からでるものと考えられた。⁽¹¹⁾「それ以上のもの」はロックにとつては相當に強い意味をもつていたように見える。その點に、力と原因との觀念が接近して考えられ、そのために多くの混亂をひきおこした理由の一つが見られるように思われる。觀念の背後に自然的秩序の存在を確信した結果、自然的秩序そのものの構成をきりこんで問題にすることができなかつた、かれの理論的態度とこれは關係がある問題である。

原因の觀念は力の觀念にむすびついている。したがつて原因が關係の觀念であるなら、力も關係の觀念であるべきはずである。力の觀念の例の一つには熱と金との關係があげられたが、因果の觀念の例にも熱と wax との關係があげられている。ほとんど同じ例である。差異は、力の場合には、原因の場合にはないところの可能性の觀念があることである。可能性についてはあとで論ずるけれども、可能性は現實性によつてのみ考えるべきであるなら、力が可能性であることによつて、單純觀念となることは理解しにくくなる。現實性と可能性との關係を考えると、functional (關係的に、機能的に) に考えないで、いわば形而上學的に考えるならば、すなわち、可能性がまず實在し、そこから現實性が展開されてくると考えるならば、いゝかえれば、可能性を substantial (實體的に) に考えるならば、問題はまた變つてくる。すなわち、なにが可能であるかは、なにが現實的になりえたかによつて考えないで、可能性を多くの現實をうみだしうるなにか實在する實體的なものと考えるとき、問題は變つてくる。ロックはこの考え方に立つている。力は原因と同じようにみられながら、原因とはちがつて單純觀念でありうるのはこの立場でのみ考えられるからである。この考え方が問題を含むことは、しかし、前のまゝ變りはない。したがつて因果關係からみれば力が單純觀念であるのは疑問となつてくる。

作用 (operation)、産出する (produce) は規則的繼起から本來は逆に考えるべき性質の觀念である。これらの觀念を因果關係の説明にロックが使用するの、かれが因果關係を規則的繼起以上のものとみるからである。作用の觀念は常識的に使用する場合別として、因果關係を説明するにたる學術用語ではない。因果關係を機能的にみないで、實體的力のはたらきとみる立場でのみ現われる觀念である。作用されたかどうかは、作用の結果からのみみうるの

あつて、やはりこの概念の根柢には關係の觀念があるというべきである。したがつてこの點からみても作用の觀念は單純觀念ではない。

可能性は現實性からみられるべきである。他のものの原因となつて他のものにはたらきかける可能性は、それがかつてはたらいとか、それと同じものがはたらいとかにかかつてきめられる。自然の整一性はもちろんこの前提である。それは承認する。經驗にゆいつの觀念の起原を求めるロックの思想動機からみれば、いつか現實的となつたもののみが可能的と考えられるべきである。そうでない場合には、そのものの構成要素がすでに可能性を明瞭にした點についてだけ、可能性が承認されるべきはずである。可能性は現實性に關係的である。こうみれば、可能性からみても力の觀念は關係的であり、したがつて複合觀念であつて、單純觀念ではないように見える。しかし、ロックは力は單純觀念であるというのであるから、ロック解釋の困難の一つがここに現われてくる。

ロックがこのように考える理由は想像することはできる。かれは色を視覺をつうじて單純觀念としてうけとることができるように、力を實在する客觀的なものとして、感覺と反省とをつうじて單純觀念としてうけとることができると考えた。感覺の變化をつうじては、變化はしりえても、力の感覺はありえない。したがつて、感覺と反省から力の單純觀念をうるといひながら、じつさいには、反省から力の内部的感覺を、したがつてその單純觀念をえようとしたのである。力の觀念の理論はこうしてつぎの段階にうつる。かれは受動的な力よりも、能動的な力をより本來的な力と考えるが、外的世界に現われる力は受動的な力であるとし、内的世界すなわち人間の内部に現われる能動的な力が、本來的な力の觀念を與えると考える。この思想の動きは、神に能動的な力の典型をみようとするかれの理論的態度と

人間悟性論における自由についてのロックの思想

も對應している。力は能動的な action と受動的な passion とに分けられるが、ロックは action に力の單純觀念の起原を求めようとする。ここに物理學の力の概念から哲學的な力の概念へのうつりゆきがみられる。action と passion とに力を分けること自體がすでに物理學ではない。それはすでに action に力の本來の姿を求めようとしている態度の現われである。物理學的には action には reaction が對立されるべきで、反動は passion とその性格をことしてゐる。action と passion とに力を分ける考え方は、すでに外的自然に對立したなにか人間的なもの、いいかえれば、客觀的なものに對立した主觀的なものを豫想している。すなわち、自發性の觀念がその底にひそんでいるとみななければならない。これから明らかにしようとするように、自發性の觀念こそ、ロックの力の單純觀念の本質をなすものであつた。ホッブスは力のこの解釋をとらず物理學の力の觀念でおしとおした。觀念の起原はもつぱら感覺に求められた。ロックが觀念の起原として感覺の外に反省を加えたのは、ホッブスの合理主義的唯物論に對する反省であり、修正であつたのである。ライブニツはこの點についてロックと同じ歩調をとつてゐる。⁽¹²⁾スピノザも Ethica において、やゝちががつた意味においてはあつたが、action と passion とを區別し、action に人間の行爲の基礎をおこうとしてゐる。この意味における action を重視する哲學者は一樣に人間の自發性を重視する人々であつた。passion は力としては受動であるが、また、人間的に情念をも意味してゐる。情念は人間の受動性を意味するものとも考えられるからである。それに對して action は人間の自發性に基く行爲を意味するものと考えられる。action は、このように、物理學の意味と哲學の意味（倫理學の意味）とをあわせもつてゐる。ロックはこれらを正確には區別していない。しかし第二十一章の調子によれば、力の物理學の意味からその哲學の意味へのうつりゆきが感じられる。

ロックによれば、能動的な力 (action) は、我々がその觀念をわかちうるものとしては、ただ二種である。すなわち、思考 (thinking) と運動 (motion) とである。物體は思考の觀念を與えない。物體はまた運動の始まり (beginning) の觀念を與えない。靜止している物體は any active power to move の觀念を與えない。それが動かされているときは、その運動は action であるよりもむしろ passion である。あるものが他のものから動かされるときには、運動の傳搬があるだけで、始動はない。そこには、力の漠然たる觀念があるだけで、物體の中にはたらいっている能動的な力の觀念はない。それは一つの action を産出するものではなく、ただ passion の繼續にすぎない。運動の開始の觀念は、われわれの内部のできごとを反省することによりつてえられる。そこでは、ただ意志することによつて、たんに心の思考 (thought) によつて、まえに靜止していた身體の諸部分を動かすことができるのを、われわれは經驗によつて知つてゐる。感覺による物體の作用の觀察からは、能動的な力の不完全な漠然とした觀念をうるだけである。第四節で上のようにロックはのべてゐる。さきに、自發性とよんだ運動の開始の意識が能動的な力の觀念をわれわれに與えるとかは考へる。そしてそれを意志の自覺に求める。ここから、自由がこの章でとりあげられる理由もほぼ推察されるであらう。自由は意志に深い關係をもつからである。ロックは第五節で意志についてのべはじめるけれども、意志と自由の問題にうつるまえに、力の觀念をこの新しい要素を考慮にいたした上で、さらに明瞭にしておかなければならない。

たしかに人間は意志による行爲を自覺することができる。すなわち、一つの考えから身體の運動を始めることができる。しかし、考えが運動を始めるのは、はたしてロックのいうように産出であらうか。手を上げることを例にして

吟味してみよう。手を上げようと思う。この考えと手を上げる動作がどのように結びついているかはしらないけれども、われわれはこの考えにつづいて手を上げることができる。こう考えなかつたならば手を上げなかつたろうし、こう考えればいつでも手を上げるのであるから、考えが手の運動の前にあつて、その條件となつてゐることは少しも疑はない。しかし、考えが手をあげさせたのであろうか。考えが動機（物理學的意味ではなく心理學意味において）となつて手が上げられるけれども、この運動の原因は人間の肉體的ななかではないだろうか。運動のみが運動の原因であると考えるべきではないだろうか。考えがそれ自身運動であるか、心が運動の原因でありうるかでなければ、こうはいえない。ロックは心身の關係については別になにものべていない。ライブニツの不滿もその點にあつた。ライブニツは身體のすべての變化は心のすべての變化に應ずると考えてゐる。いわゆる外的運動は別として人間の身體の運動は、肉體的の側の原因と、意志の側の原因と二つの原因をもつものである。すくなくとも考えが運動をおこすのは、一つの物理的原因が他の物理的結果をひきおこすのと、完全に同じであるとはいえない。カントが明らかにしたようにここには、因果關係の二系列が考えられる。一方は、いわゆる現象の因果關係であり、他方は、自由による因果關係である。カントが自由の因果關係によつてなにを意味したかはあとにのべるが、それはここでいう考えによつて運動が始められることをそのまま、さしてゐるのではない。しかし、カントが人間において、叡知的性格と經驗的性格とが共在していると考えるとき、人間の中に始源をもつ運動と、物理的現象の因果の必然的系列の中に完全に制約されている運動とが、あると考えるとき、ロックが當面したその同じ問題を解釋しようとしたものと考えられる。

このようにみてくれば、ロックは力の觀念をうる源泉として意志の自覺を問題とするだけではなく、自然界における人間の特殊の位置を明瞭にするためにも、意志を問題としたといえる。

さきにのべたロックの action にかんする思想によれば、物體の運動は passion をもつのみである。⁽¹⁴⁾ 受動は能動がなければ存在しえないから、物體の運動は、どこかその外に能動の原因をもたなければならぬ。したがつて物體の運動には第一原因すなわち世界の運動に第一の始動を與えるところのものが物體の外に存在しなければならぬ。あるいは人間がその能動者と考えられなければならない。人間は能動者であるけれども、一切の物體の運動の原因とは考えられないから、物體の運動の第一原因が考えられなければならない。この第一原因はロックにとつては、いうまでもなく神であらう。運動の概念をこのように、第一原因にまでさかのぼらせて考えるのは、近代自然科学における運動の諸法則をつうじて考えられる運動の概念とはいちじるしく變つてゐる。それは形而上學的である。かつそれは機能的に把握された運動の概念ではなく、實體的に把握された運動の概念である。機能的というのは關係的というこゝとであり、實體的というのは、關係的に把握されるべきものを、ある一つの實體がそれを含むように考える考え方である。ロックは關係を考えなかつたわけではないが、關係をもでるだけ實體的に考えたといえる。因果關係において原因が結果を産出すると考えるなどは、原因をいわば實體的に考えることである。この實體的な考え方のゆゑに、運動の基礎に力の觀念がおかれる。運動を實體的に把握したものが力と考えられるからである。

われわれの問題は力の概念ではなく、力の單純觀念がいかにしてえられるかを明らかにすることにある。人間の意志をつうじて現われる運動の開始の自覺はたして力の單純觀念を與えるであらうか。

人間悟性論における自由についてのロックの思想

われわれはあきらかに意志的運動の自覺をもっている。意志がなければ存在しえなかつた運動の存在を知っている。しかしそのとき、ある考え、すなわちある觀念がまず意識され、さきの例によれば手を上げようと思うこと、それにつづいて手が上げられたことの意識があるだけではなかつたか。どこに力の觀念があつたらうか。觀念が運動をおこしたといえるのは、一つの觀念がまず意識され、その觀念に應ずる運動がおき、それが意識されて始めていえることである。觀念だけあつて、それに伴う運動がなければ、そうはいえない。したがつて觀念だけでは力の單純觀念はありえない。觀念と運動との關係的な考察のあとで、觀念が運動の原因——ロックにしたがつてかういうとして——であるといふのである。

力は作用の觀念なしには成立しないが、それだけでもまた成立しない。現實の作用を可能性において眺め、かつ、その可能性は一つの實體に屬するものとして考えられたときに力の觀念は生ずる。力は實體の觀念からきりはなすことができない。しかし、實體の觀念は、ロックが全力をあげて證明することを企てたように、複合觀念である。實體の觀念の批判は悟性論の中心課題の一つである。ロックによれば實體の觀念は力の單純觀念から複合觀念として把握される。力が實體の觀念に關係させられることなしには、觀念されないというのは明らかにロックに反對することである。ロックにしたがえば力が實體に關係するのは、力が實體の構成要素であるからであり、われわれがそう考えるのは、力の觀念自身が實體の觀念と關係することなしには成立しないからである。このことはなお説明を必要とする。悟性論で實體の觀念と力の觀念との關係を論じている場所は主として第二卷第八章と同じく第二十三章とである。まず、第八章では單純觀念の進んだ考察がなされるのであつて、そこでは、物體の諸性質と人間との關係が考えられ、

物體の諸性質が力を主體として考えられる。諸性質と物體との關係が力と實體との關係と考えられる。つぎに、第十三章では實體の複合觀念を構成する單純觀念が主として力であることがのべられ、實體の觀念を中心として、力と實體との關係が論じられる。問題の提出のしかたはちがつているが、問題そのものは同じである。實體にかんするこれらの理論を完全にここにのべることはできない。必要なものだけで満足しなければならない。

われわれの心がその中に認めるものはすべて觀念であるが、われわれの心に觀念を生ぜしめる力をロックは物體の性質とよぶ。この關係で考えられる物體の性質は三種である。

第一に、物體は、それがいかなる状態におかれようとも、それに關係なく變化しない、かつその物體から分離しない性質をもっている。いわば物體の本質を構する性質である。それは本源的性質または第一性質とよばれる。第一性質はわれわれに固體性、延長、形態、運動あるいは靜止および數の諸觀念を與える。⁽¹⁵⁾

第二に、物體は、その第一性質、すなわちその感覺しえない諸部分の大きさ、形態、組織、および運動によつて、われわれの中に色、音、味等のいろいろの感覺を生ずる力をもっている。それはほんとうは對象自體においてはなにもものでもなく、ただ力である。(nothing in the objects themselves, but powers……)これは第二性質とよばれる。⁽¹⁶⁾

第三に、物體は他の物體にはたらきかける力をもっている。それは第三性質とよばれる。それは物體の中にある實在的な一つの性質である。第二性質は物體と人間との間の——感覺能力をもつ存在を含めて——關係で考えられる力の觀念であるが、第三性質は物體と他の物體との間の關係で考えられる力の觀念である。力の觀念としては第二性質と第三性質とは同じものと見ることができる。

第一性質は力とはよばれていない。それは物體を他のものとは無關係にそれ自體として眺めるときに生ずる觀念である。第一性質は諸關係の基體となる物體の性質である。第二、三性質は第一性質のゆえに物體が他のものに與へる作用を問題として、その作用が力によつて生じうると考え、その力をそふんだものである。物體は他の物體との關係においてみられている。ここからみれば、力は關係の中においてのみ成立する觀念である。

第一性質は力ではないようにみえる。しかし、第一性質の諸觀念が人間にどうして與えられるかを説明するとき、第一性質の力の問題が発生してくる。外的對象はわれわれの心と結合されていないから、その第一性質をわれわれが生ずることができるのは、「あきらかに、ある運動が、そこから、われわれの神經あるいは生氣 (animal spirits) によつて、また身體の諸部分によつて、腦髓すなわち感覺の座までつづけられて、そこでわれわれの心の中に、これらの物體にかんする諸觀念を生ずる」⁽¹⁸⁾からである。この場合の運動はすでにのべたように力を豫想しないでは考えられぬものである。したがつて、物體の性質は力としてみれば、まず、第一性質を人間にしらせるような運動をおこす力として、つぎに、人間に感覺を生ぜしめる力として、さらに、他の物體にはたらきかける力として把握される。物體は受動的な力をもつのみで、能動的な力をもたぬとすれば、これらの物體の諸力はどこにその根源をもつのであろうか。第二、第三性質の作用は理解しやすいけれども、第一性質の作用はこれだけでは説明が不十分で理解しがたい。物體の本質的構造を運動によつて傳へることと、本質的構造について諸觀念をもつことは同じであるか、いゝかえれば運動は觀念なのであるか、あるいはそうでないのか、問題である。人間の諸觀念が物體に關係して把握されようとしていることはあきらかに理解され、また正しいとして承認されるべきものであるが、微細な點についてはなお疑問が

ある。

この第八章ではロックの意味する實體の觀念は表面には現われていない。しかし實際には力の觀念と實體の觀念とはすでにここで關係的に現われている。そのことはあとで明らかにするとして第二十三章にうつる。

ロックにとつて實體の觀念は多くの單純觀念の結合にほかならない。特殊の實體の中に存在する諸單純觀念の最大多數を集め、結合した場合には、最も完全な實體の觀念がえられる。⁽¹⁹⁾その諸單純觀念の中には能動的な諸力と受動的な諸力 (capacities) が数えられる。「それらは單純觀念ではないけれども、この點に關しては、かんたんにするため、便宜的にそれらの中に数えられても十分であらう。⁽²⁰⁾」ここに一つの重要な手がかりがえられる。ロックは力を單純觀念と考えているけれども、それは、ここに明言されているように、ほんとうは單純觀念ではないのである。第二卷第二十一章第三節においても、力が關係をその内に含むことをきわめて暗示的に、かつかんたんにのべているが、もし力が關係を含むならば、それは單純觀念ではない。しかし、悟性論の全體を貫く調子は力が單純觀念であることを示している。便宜のために力が單純觀念と考えられることは許さるべきであらうか。力が本來單純觀念でないならば、それとともに、重要な單純觀念としてあげられた存在 (existence)、統一 (unity) も同じように、便宜のため、單純觀念にたんに数えられるものにすぎない、と考えられているのだらうか。力については上のように明瞭にのべられるけれども、力と同じ取扱ひを受けている、他の二つの觀念には、なにごとのべられていない。この問題をどう解決するかによつて悟性論はすくなくとも、觀念の起原の理論にかんしては、すくなくからぬ影響をうける。悟性論の理論的統一性のことは別として、力を單純觀念でないとするロックの考えは、われわれにはきわめて重大な結果

人間悟性論における自由についてのロックの思想

をもたらす。力が關係的であることを明らかにすることが當面の目的であつたからである。ロックにとつて力が單純觀念であるかどうかということだけについてはここで終決を與えてもいゝかもしれない。しかし、かれの理論の全體的關連の中で、なおこの問題を吟味し、力の觀念の本質を明らかにするために、さきへ進まなければならない。

一つの實體を構成している實質は大部分われわれには分らない。われわれはその第二性質である諸力によつて一つの實體と他の實體とを區別する。したがつて、實體の觀念を構成する觀念は主として實體の諸力の觀念である。實體はその大部分、その諸力の觀念の結合であるといふことができる。

實體の第二性質である諸力は、もしも人間が實體の極微の部分の構造をすることができるといふほど鋭い感覺をもつていたなら、別のものになる。それにしても、第二性質が物體の力であることには變りはない。

上の二章のかれの思想によつて實體の觀念と力の觀念との關係は明らかにされる。ロックにとつて力の觀念は二つの意味をもつてゐる。力は、まず、物體ではなく、物體のうちに存在するなにかである。力は、つぎに、實體の觀念を構成する主要な觀念である。まえの場合には力は單獨にでも考えうる。そこでは、力と力の關係が問題でなく、力と、それをその中に存在せしめる物體との、關係が問題となつてゐる。あとの場合には、まえの力の觀念のほかに、他の諸力と結合して一つの實體の觀念を構成するところの、力の觀念が問題となつてゐる。あとの場合には諸力の結合が主たる問題であるために、力とその支えとの問題が前面に出されてゐない。あとの場合にのみ實體と力との觀念の關係があるようにみえる。しかしほんとうは、まえの場合にすでにそれがあつたのである。

ロックは實體の觀念を論ずる場合に、個々の實體を構成する諸觀念がなんであるかに注意をしすぎた。たとえば、

金の實體の觀念を構成する諸觀念は、黃色、大きい重さ、展性、可溶性、王水にとけることなどの觀念であるというように。ロックはこれらの、力にすぎない觀念の結合の背後に、それらを支えるものとしての、それらとはまったく區別されたあるものとしての實體の觀念を排斥しようとした。實體の觀念は諸觀念の結合にすぎないことを強調するために一つの問題を見落している。力と、その支えとしての物體、または作用者との關係は、論理的にみて實體の觀念に關係している。しかし、ロックはそれに注意しなかつた。物體が實在している。それは内部に人間には見えぬ複雑な構成をもっている。物體は他の物體にはたきかける力をもっている。力はもちろん物體の内部的組織からであるものではあるが、したがつて物體なしに力は存在しえないけれども、物體の組織自體とは區別される。したがつて力は物體の組織を構成することなしに、それに屬している。力と物體との關係は實體とその性質、または屬性との關係である。ロックはのちにもふれることがあるように、力を物體および作用者にぞくするものとして規定している。この關係が實體とその性質との關係であることは意識しているけれども、この關係をさらに深くきりこんで吟味しようとしてはいない。すなわち、力の觀念はなお形而上學に物體の、あるいは作用者——もつとも典型的には人間である——の性質と考へ、實體と性質との論理的關係がなんであるかはすこしもふれていない。第二十三章における實體の觀念の批判にはこのことにふれるものがすこしもみいだされない。

力はそれ自體でけつして存在しない。それはある、そのものの根柢にあるものとしての基體の性質としてのみ存在しうる。力は、すでにまえにふれたように、一つの作用の可能性である。可能性が實在として考えられるのは一つの基體に可能的に含まれるものとしてである。ある可能性はいまは現實性ではないけれども、ある實體に含まれ、その

實體が現實に存在するならば、その實體の現實性に擔われて存在するといえる。ないものがある現實性に含まれていることが可能性の一つの性格である。したがつて、力の觀念はその根柢にそれを支える同一性を保持する實體の觀念を豫想しなければならぬ。觀念が一つの意識——一つの感覺として——でなければならぬなら、力の觀念が成立しうるためには同一性の意識がなければならぬ。恐らくその同一性の意識はカントの先驗的統覺のように先驗的論理的な性格をもたぬであらうけれども、なお同じような性格をもつものと考えられる。カントの統覺はアブリアリなものであるのに對し、ロックの同一性の意識は經驗的すなわちアポステリオリなものである。すなわち、ロックにとつては、同一性の要請ではなく、その現實の意識——しかも個々の人間の——がなければならぬ。この點ではロックはあまりにも心理學的であるとまでいわれうるであらう。人間は觀念を原因とする運動を始動する。今はしないで、人間が自己同一を保持するかぎり、それは可能性として人間の中に保持される。それが力の觀念である。

このようにみてくるとき、力の觀念が二重に關係的であることが明らかにされる。まず、背後にある同一性に對して、すなわち實體性に對して性質である意味で、力は關係的である。つぎに、はたらきとして、なにものかにはたらくものとして、はたらきかけられるものに對して、力は關係的である。action と passion とが二種の力であるというのは力の種類が二つであることを意味するものではなく、力が關係的であることを意味するものである。したがつてロックが action が passion よりも優れた意味で力であると考えるのは、かれがさらに別な問題を考慮しているからにほかならない。

このように力はあきらかに關係の觀念である。ロックもそれを承認している。それにもかかわらずかれがそれを單

純觀念とみようとするのは、恐らくつぎのような理由に基くものと考えられる。

第一に、力は實體の複合觀念の主要な要素である。多くの力が實體の觀念を構成する。したがつて力はその要素である意味で單純であると考えられる。複合的なものを構成する要素が單純と考えられるからである。この場合には、單純觀念のいろいろな性質よりも、それと複合觀念との關係が、よりつよく考慮されている。力は實體の觀念の主要な要素として考えられたから、なおさらこの點が重視されたように思われる。

第二に、單純觀念は人間のつくるものではなく、人間のうけとるものである。關係は單純觀念から結合され形成される。力は物體および人間のうちにある實在的なものと考えられる。したがつて、力の觀念は實在性にうらづけられる意味で單純觀念と考えられる。このように、力の觀念だけについてみても單純觀念と複合觀念との區別は多くの困難を含んでいるようである。他の諸觀念についてみても同じような問題があるにちがいない。しかしそれだけでロックの單純觀念の思想を排斥することもできない。力の觀念がけつきよくは關係の觀念であることをのべるだけで他の問題には、ここではふれないでおく。

ロックの力の觀念にかんする理論はつぎのようにまとめうる。

力の觀念は、單純觀念であるとのべられ、またそれには必ずしも理由がなくはないが、けつきよく、關係的である。關係の觀念がすべて複合的であるならば、それは複合觀念である。關係がなお單純觀念でありうるならば問題は別である。力が關係的であつて、本來單純觀念ではないことは、ロックも認めている。

力はそれ自體では存在しない。それはある實體的存在のなかに存在するなにかである。實體を關係に分解する考え

人間悟性論における自由についてのロックの思想

方をロックはとらない。むしろ、逆にこれは關係を實體にかえそうとする考え方をとる。力は實體の性質である。力はこの場合二重に關係的である。第一に力は實體の性質として、實體に關係的である。第二に、力は、一つの實體の他の實體へのはたらきの原因として關係的である。

實體の觀念と力の觀念とはつぎのような關係におかれる。實體は大部分力の觀念の結合されたものである。神を問題の外におけば、實體は物體と人間である。まず、物體は二つの力をもつと考えられる。第一に、物體は、まず、人間に物體の第一性質を感覺をつうじて與える力をもち、ついで、人間の感覺に色・音・などのいわゆる感覺的性質を與える力をもつ。この力は物體の第二性質とよばれる。物體についてのすべての人間の觀念はこの實體の力によつて與えられる。第二に、物體は他の物體にはたらきかける、またははたらきかけられる力をもっている。これは物體の第三性質とよばれる。

つぎに、人間は物體のもつ以上二つの力のほかに、物體の感覺的性質にはたらかれて、感覺をうけとる受動的な力をもつ。感覺は物體の第二性質によつておこされると考えられるが、感覺が物體相互間の運動における能動と受動との關係においてみられる受動であるかどうかはここではふれられていない。人間はさらに、反省をつうじて自己自身のはたらきを意識する。人間は考え、また考えられた觀念によつて運動をおこし、他のものにはたらきかける力をもっている。考える力は悟性であり、運動をおこす力は意志である。この人間の力は、人間の外部からおこされないで、内部から、すなわち自己自身によつておこされるものとみられるから眞なる力と考えられる。力は變化を與えるものと考えられるが、いわゆる物體の間の物理的力はまさしくそれにあたる。人間の意識の力は物理的變化の原因ではない。

い。ここであきらかに力の概念は物理的力——感覚を生ずるといわれる物體の第二性質ですら、なお物理的力と考えられていた——の觀念から他の力の觀念に移動している。物理的力は古典的物理学の運動の法則にしたがうものであるのに、人間の力たとえば意志の力は運動の法則とは無關係である。したがって物理的運動にあらわれる力の觀念とは別なものがここに現われたことになる。ロックはこの後者すなわち人間の力が眞の意味の力であるとのべるが、それが眞の力といわれるためには、物理的力がその上に理解されうることが前提されなければならぬ。しかし、物理的力は人間の力とはまったく別のものであると思われる。物理的力の概念構成が人間の力の意識によつて可能となるといふように、認識論的に考えることはできる。しかし、ロックがそうであるとはそのまゝいうことはできない。

意志は身體をつうじて運動をおこすことができる。その點からいえば、意志は物理的力と完全に無關係であるとはいえない。しかし、思考は、たとえば、一つの觀念と他の觀念とを比較する思考は、運動ではない。

運動と思考とを共通に含む觀念は變化である。力は變化の可能性と考えられる。力をかが思考に求めたのはつぎの理由によると考えられる。

變化をおこすものが力である。おこすことはそのものをありはじめさせる、すなわち、あらしめることであるが、そのものをあらせようと意識して、その意識にしたがつてあらしめることがおこすことと考えられる。手をあげることを意識して、手をあげるならば、手をあげることは手をあげようとする意識から始められたと考えられる。あることをおこすことは、ロックにとつては、このように觀念から存在が始まる場合についていわれる。物理的生成はおこすこととは考えられない。觀念から存在が始められると考えるのは目的論立場においてである。ロックの力の觀念は

人間悟性論における自由についてのロックの思想

この意味からいえば目的論的である。

力の觀念が目的論的であることを必ずしも否定するつもりはないが、この意味の力の觀念が眞なる力の觀念であると考えられることには反對しなければならない。物體的力はすべて受動的であり、受動的なものはすべて能動的なものからおこされたものであり、能動的なものは目的論的に把握された力であるならば、力からみられるかぎり世界は目的論的體系とならざるをえない。そう考えるのはゆいつの道ではない。能動と受動との相關を許したとしても、能動が意識から出發しなければならぬ論理的理由はすこしも考えられない。形而上學的に第一原因も考えられるし、第一原因が結果を意識して、それを存在せしめる原因でなければならぬとは考える必要はない。物理的世界における能動および受動と、意識的能動および受動とはまったく別な世界にぞくする。意識的能動のみが能動であり、そのみが眞の力の觀念を與えると考えことは疑問である。ロックの眞意は人間的世界をこの概念をつうじて、物理的世界からくつきりと區別しようとするにあつたと思われる。

力の觀念はこのように人間的世界の基本的概念となつてくる。ここからそれが倫理學の意味をえてくることはもはや説明する必要はないであろう。悟性論が第二卷において觀念の起原を明らかにするべきであつたならば、第二十一章は以上で完了したはずである。實際にはロックは力の觀念から意志の觀念にうつり、さらに自由の觀念にうつりこの章の大部分を自由の觀念を明らかにするに費すのである。ロックは意志も自由もともに力と考えるから、このことは必ずしも不當とはいえないかもしれない。しかし不必要であると考えられる。ロックの力の觀念が上にのべたように倫理學の要素を多分に含んでいたこと、また、かれが理論哲學よりも實踐哲學により深く、より強い關心をもつ

ついたことなこの事情を説明するものと考える。われわれは意志と自由の問題に進めよう。

- (1) Locke, Vol. I, The Epistle to the Reader, p. 7. (2) Locke, Vol. I, p. 108. (3) Locke, Vol. I, p. 92.
(4) Locke, Vol. I, p. 220. (5) Locke, Vol. I, p. 221. (6) Leibnitz, New Essay concerning Human Understanding transl. by A. G. Langley, Chicago, 1916, p. 174. (7) Aaron, op. cit., p. 181. (8) Locke, Vol. I, p. 104. (9) Fraser, A. C., Locke, London, 1890, p. 152. (10) Locke, Vol. I, p. 321. (11) Aaron, Locke, p. 181. (12) Leibnitz, op. cit., p. 177. (13) Leibnitz, op. cit., p. 117. (14) Locke, Vol. I, p. 222. (15) Locke Vol. I, p. 112. (16) Locke, Vol. I, p. 112. (17) Locke, Vol. I, p. 112. (18) Locke, Vol. I, p. 113.
(19) Locke Vol. I, p. 293. (20) Locke, Vol. I, p. 293. (21) Locke, Vol. I, p. 313.